

27年度版教科書つれづれ 23 「ウナギのなぞを追って」(光村図書・小学4年)の巻

加藤 郁夫(読み研事務局長)

「ウナギのなぞを追って」は光村図書・小学4年生(下)の説明文である。この教材は23年度版(以下旧版)で登場したもので、27年度版(以下新版)も引き続いて収録されている。旧版では「生後わずか二日」のウナギのレプトセファルスを発見するところまでで終わっていたが、新版では「ウナギの卵」の発見までを述べている。調査の進展が、文章の変化にそのまま結びついている。

「ウナギのなぞを追って」の文章構成を確認しておこう。

はじめ	1～3段落
中	4～12段落
中1	4～7段落
中2	8～11段落
中3	12段落
おわり	13段落

3段落の後と13段落の前に行アキがある。「はじめ」では、マリアナの海がウナギが卵を産む場所であることが最近わかった。それが分かるまでに80年近くの時間がかかったと述べる。話題提示ほどぼんやりもしていないが、問題提示というにはややはっきりしない言い方であるが、この文章で述べられるうなぎの「たまごを生む場所を見つける調査」のことが紹介されている。

「おわり」は、「なぜこんな遠くまでたまごを産みにやって来るのか」「広い海の中でどうやってオスとメスは出会うことができるのか」など新たななぞを提示して終わっている。

行アキから、「はじめ—中—おわり」の構成はおおよそ推測できるが、行アキだけを理由に構成を読みとるのではなく、文章表現に根拠を持った理由をきちんと見つけていくことが大事であることは言うまでもない。

「中」は、調査のはじめの頃からたまごの発見まで時間の順序で述べられている。「中1」は、生後二十日ほどのレプトセファルスが取れるまでのことを述べている。「中2」は、これまでの調査から分かったことを整理し、仮説を立て生後二日のレプトセファルスを取るまで。「中3」は、たまごの発見について述べている。

ただ「中」の分け方については、多様に出てくることが予想される。7段落と8段落の間が分けられることは大体一致するであろう。「中2」を8～10段落、「中3」を11～12段落とする考え方もあるだろう。あるいは8～12段落で「中2」とする考え方もある。この辺りについては、実践的には柔軟な対応が求められる。大事なことは、どのような観点で分けているか、分ける理由をはっきりと子どもたちが出せるように指導していくことである。

旧版との変更点で一番大きい箇所は、すでに述べたようにたまごの発見まで述べていることである。新版の11段落12段落が新たに加わった箇所である。

まず、生後二日のレプトセファルスが取れるところを旧版と新版で比べてみる。

旧版の9～10段落を引用する。

「海山の近く」「新月のころ」という二つの予想にもとづいて、わたしたちは調査を続けました。どういわけか、たまごも、生まれてすぐのレプトセファルスもとれないことが、何年も続きました。しかし、二〇〇五年六月七日、新月の日の昼下がり、マリアナ諸島の西にある海山付近を調査していたときのことで。そのしゅんかんは、やって来ました。

青い海から白いあみがゆらゆらと上がってきました。中から、小さく丸まった白い糸くずのようなものがたくさん見つかりました。すぐに調べると、それらは、体長五ミリメートル、生後わずか二日の、ウナギのレプトセファルスであることが分かりました。ついに、わたしたちは、ウナギがたまごを産む場所にたどり着くことができたのです。二つの予想にもとづいて調査を始めた日から、実に、十年近くの年月が流れていました。

新版 10 段落では、次のようになっている。

「海山の近く」「新月のころ」という二つの予想にもとづいて、わたしたちは調査を続けました。どういわけか、たまごも、生まれてすぐのレプトセファルスもとれないことが、何年も続きました。しかし、二〇〇五年六月七日、新月の日、マリアナ諸島の西にある海山付近で体長五ミリメートル、生後わずか二日の、ウナギのレプトセファルスを見つけることができました。確実にたまごに近づいていると、私たちの期待は高まりました。けれども、たまごは、レプトセファルスよりずっとせまいはんに固まっているので、とるためには、さらに場所をしぼりこまなければなりません。

旧版の教科書が出た段階で、すでにウナギのたまごは発見されていた。しかし、それを教科書に反映する時間はなかったため、生後二日のレプトセファルスの発見が、調査のクライマックスとして述べられている。したがって、その述べ方も詳しい。

旧版では日付の後に「新月の日の昼下がり」と述べているが、新版では「新月の日」と時間帯には触れていない。新版では「マリアナ諸島の西にある海山付近で体長五ミリメートル、生後わずか二日の、ウナギのレプトセファルスを見つけることができました。」とあっさり結果をのべているが、旧版は「マリアナ諸島の西にある海山付近を調査していたときのことで。そのしゅんかんは、やって来ました。」と期待を持たせる書き方をし、段落を変えて、発見の様子をさらに詳しく述べていた。

この箇所は、新版と旧版を比較して検討させても面白いだろう。同じことを述べているが、両者にどのような違いがあるか、またなぜこのような違いが生まれたのかを考えることは、文章表現の効果を考える上では有効であろう。

以下に示す、旧版 9 段落の最後から 10 段落の最初の二文までは、新版ではすっぱり抜けている。

そのしゅんかんは、やって来ました。／青い海から白いあみがゆらゆらと上がってきました。中から、小さく丸まった白い糸くずのようなものがたくさん見つかりました。

「そのしゅんかんは、やって来ました。」(新版には 12 段落に「ついにそのしゅんかんは、やって来ました」という表現がある)という文は、もともとなくても大して意味は変わらない一文である。しかし、この一文を入れることで、読者の期待は盛り上がる。つまり、淡々と事実を述べるのではなく、「たまごが見つかったのか？」と読者に期待を持たせる書き方なのである。その後の二文は発見までの過程をより詳しく述べたものである。読んでみるとサラッと読み流してしまう文であるが、ここは書きの観点から捉え直させたい。こういう文が書けることで、より詳しく述べるこ

とが可能になる。また分量を書くこともできるようになるのである。

書くのが苦手な子どもは、こういった文が書けないのである。詳しく具体的に述べるのが苦手なのである。だからこそ、文章を読む過程の中で、詳しく書くとはどういうことか、具体的に述べるとはどういうことかを、確認していくことが大切になる。そうすると、自分が書く時に、その経験を応用できるのである。

さらに、改めて旧版のこの箇所を読み返してみると、「あれ？」と思うことがある。当然のことながら、旧版でもウナギのたまごを探しているのである。しかし、旧版は「そのしゅんかんは、やって来ました。」と期待を持たせておきながら見つけたのは「生後わずか二日の、ウナギのレプトセファルス」なのである。たまごではないのだ。にもかかわらず「ついに、わたしたちは、ウナギがたまごを産む場所にたどり着くことができたのです。」と述べている。確かに「生後わずか二日」であるから、たまごとかなり近いことは間違いないが、そこにはズレがある。述べ方としての正確性をやや欠いていると言える。旧版と比較することで、このような批判的な読みも可能となる。

次に、新版の12段落を見てみよう。

二〇〇九年五月二十二日、新月の二日前の明け方、ついにそのしゅんかんは、やって来ました。ウナギのたまごらしいものが二つとれたのです。大きさは、ほんの一・六ミリメートル。船内は、期待とこうふんに包まれました。船の研究室のモニターにうつし出されているたまごは、にじ色にかがやいていました。さらにくわしく調べてみると、これらはたしかにウナギのたまごにまちがいないことが分かりました。そのとき、船の中に大きなかんせいがあがりました。ついに、わたしたちは、ウナギがたまごを産む場所にたどり着くことができたのです。初めて調査に加わったときから、三十六年の年月が流れていました。

まずは、「二〇〇九年五月二十二日、新月の二日前の明け方」という表現に着目したい。ここまですて出てきた時間を表す記述を抜き出してみよう。

3段落 一九三〇年ごろ

5段落 一九六七年

6段落 一九七三年

7段落 一九九一年

8段落 一九九四年ごろ

10段落 二〇〇五年六月七日、新月の日

12段落 二〇〇九年五月二十二日、新月の二日前の明け方

これだけでも明らかなように、12段落の記述が一番長い。言い換えれば、年月日、月齢、時間と一番細かく述べているのである。次が、10段落の「生後わずか二日の、ウナギのレプトセファルス」を見つけた日である。

ここから、12段落の出来事を一番詳しく述べようとしていることが分かる。次いで、10段落である。もちろん、時の記述の長さだけで、詳しく述べていることが常に分かるわけではない。しかし、詳しく述べるということは、より具体的に述べることであるから記述が細部にわたるのは当然のことである。

読み研の初代代表であった大西忠治氏は「見たまま記録」「まとめ記録」という言葉を使って、読み分けをするといっておられた。

授業では、時の記述を抜き出しながら、その表現の違いを発見し、その意味を考えるような展開

ができるとよいのではないだろうか。

また、時の記述の粗密に関わっては、こんなことも考えても面白い。5段落6段落7段落の記述は、その年の何月何日といった細かい日時まで分かっているはずである。調査をしているのだから、その記録を残しておくのが普通である。では、なぜ一九六七年の何月何日に初めてレプトセファルスが採れたと述べないのだろうか。またその時の様子を詳しく述べることも可能ではないだろうか。なぜ（筆者はその調査に加わっていないとしても）そうしないのだろうか。

ここで単に記録をとることと、記録に基づいて文章化することの違いを考えてみよう。記録をとる場合、一つ一つの事象について日時や場所、周りの状況や事象自体の様子や状態などについて詳細に残すであろう。しかし文章化しようとしたとき、そこには当然のことながら何について記述するのかという意図が存在する。したがって、記録に残しておいたことをすべてが文章に表現されるわけではなく、カットされる部分もあるし、さらに思い出して付け加わる部分も出てくるであろう。文章化されることは、何らかの意味で焦点化が図られるのである。

したがって、文章における時間の粗密を読み分けることは、筆者がどのような意図のもとに述べようとしているかを読み取ることでもあるのだ。

すべての部分を細かく述べると（教科書のスペースの問題はひとまず置くとして）、どこに重点があるのかがわかりにくくなってしまふ。文章としてのメリハリもなくなってしまふ。述べ方に軽重をつけることで、筆者が何を伝えたいのか、どこを特にわかってほしいのかが、わかりやすくなるのである。

さらに、12段落の述べ方は、詳しく述べた文章として、真似させていくことも考えてよいだろう。